

但馬のクモ類 2 件

山本 一幸

1. ひのそ島のシッチコモリグモ

円山川の下流部にある「ひのそ島」(豊岡市赤石)と呼ばれる中州から、1994年7月に本庄四郎氏によって、西日本では極めて稀なコモリグモ科のシッチコモリグモが兵庫県で初めて採集され、生息が確認された。島内からは、絶滅が危惧される湿地性の貴重な植物も発見されており、ひのそ島の自然環境を保全することは重要な意味をもっている。しかし、河川の氾濫の原因になるなどの理由から、管理者の建設省および豊岡市は中州を撤去する方針を打ち出しており、治水と自然保護の両面で問題となっている(神戸新聞)。

筆者は、1995年7月15日、「但馬学研究会」(島垣晃会長)による島内の自然観察会に加わる機会を得た。本庄氏の案内のもとにシッチコモリグモの生態について若干の知見を得るとともに、数種のコモリグモ類を採集することができたので、その結果を報告する。

[採集データ: 1995年7月15日, 豊岡市赤石ひのそ島, 筆者採集(全て成熟個体)].

コモリグモ科 Lycosidae

1. シッチコモリグモ *Hygrolycosa umidicola*
2♂, 1♀, 卵のう。



写真1. シッチコモリグモ♂

2. ハリゲコモリグモ *Pardosa laura* 1♂, 1♀.
3. ミナミコモリグモ *Pirata meridionalis*
1♂, 3♀, 卵のう。
4. クラークコモリグモ *P. clercki* 1♀.
5. カイゾクコモリグモ *P. piraticus* 1♀.
6. キバラコモリグモ *P. subpiraticus* 7♀, 卵のう。

シッチコモリグモの分布および生態

本種は、札幌の北海道大学構内から採集された標本により、田中(1978)が記載した。分布は北海道と、東北から関東にかけての東日本に広く認められ、西日本では、田中(私信)によれば「ひのそ島」と島根県平田市斐伊川河口の2か所でしか確認されていない。

今回、成熟した♂と卵のうを腹部に付けた♀が観察され、さらに2~3歳の幼体もみられた。このことから、成熟個体の出現時期は6月から7月にかけて幅があると推測される。田中(1978)によれば、卵のう形成は6月頃と9月頃の年2回みられるとあり、あるいは東日本のものと比較して若干のずれがあるのでは、と思われる。クモは放置された湿田に群生する湿地性植物の根元付近でみつかり(写真1:♂, 写真2:♀),

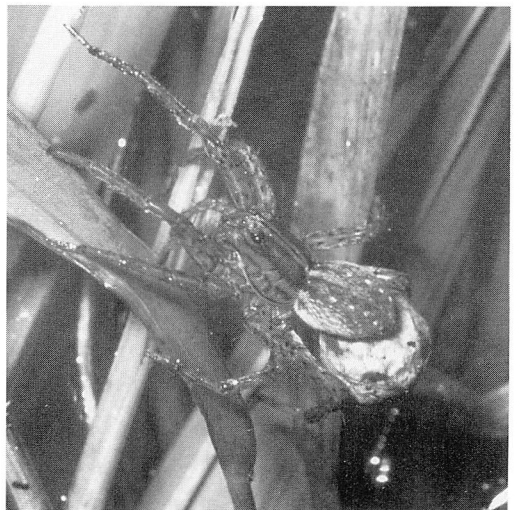


写真2. シッチコモリグモ♀

同じような場所で卵のうを付けたキバラコモリグモやミナミコモリグモがみられた。逃走のために水面を走行する行動がみられ、まれに植物の茎を伝って水中に潜水して身を隠す。水中に潜水する行動は、河川の上流部に生息するキシダグモ科のアオグロハシリグモにみられるが、コモリグモ科ではシッチコモリグモ以外は知らない。

今回の報告にあたり、本庄四郎氏はシッチコモリグモ発見の経緯や生息地の情報を快く提供して下さいました。また、園田学園女子短期大学の田中穂積氏からは、日頃から貴重な文献の別刷りを多数いただいております。筆者の不躰な手紙にも快く貴重な情報をご教示下さいました。この場をお借りして、両氏に心より謝辞を申し上げます。

毎回、問題意識をもってテーマを決め、熱意をもって但馬を知ろうとする「但馬学研究会」には、筆者も会員の一人に加えていただき、感謝している。今回、ひのそ島に渡る機会を与えていただき、この場にてお礼申し上げます。

参考文献

- 田中穂積 (1978) *Hygrolycos* 属のクモ日本に産す。Acta arachnol., 28: 13-18
- Tanaka H. (1988) Lycosid spiders of Japan I The genus *Pirata* Sundevall. Acta arachnol., 36: 33-77
- 神戸新聞 (1994) 珍種グモ シッチコモリグモ見つけた。(12月3日朝刊、但馬版)。

2. キジロオヒキグモ採集記

キジロオヒキグモ *Arachnura logio*

1 ♀, 兵庫県城崎郡竹野町竹野, 1997-IX-28, 山本一幸採集

珍種に出会う前は、何か不思議な予感めいたものを感じることがある。

珍種はなかなか採集できないから珍種であって、非常に確率の小さい偶然が重なって初めてそれを手にすることができるのである。なにぶんにもフィールドに採集に出向かなければ、その偶然は訪れない。

その日は朝方、雨が降っていた。野外で行動するのは雨は何かと支障をきたす。出発を渋ったあげく、回復するという天気予報に励まされ、家族から追い立てられるように家を出た。

現地に到着すると雨はあがり、空を覆っていた雲の

隙間から青空が覗いている。やれ嬉しや。雨あがりの清々しい空気を吸った開放感からか、ふと今日は何か良いことがありそうな、珍しいクモに出会えそうな予感がした。

場所は、竹野海岸海水浴場の東側にある「ジャジャ山公園」。竹野海洋センターの駐車場に車を止め、整備された遊歩道の階段を尾根の先端にある展望台まで登る。展望台からは竹野の町並みとコバルトブルーの海に横たわる猫崎半島が一望され、雲間からの陽光に映え、ひととき美しく見えた。

展望台から先の尾根沿いの西側はシイなどからなる照葉樹林になっており、遊歩道に張り出した枝の下に傘を上向きに開き、枝を叩いて落ちてくるクモや昆虫などを受けて採集する。落ちてきたアサヒエビグモやマジロハエトリが、傘の中をあわてて走る。

頂付近に遊歩道から左に折れる東側の尾根へと続く枝道がある。建設当初は四輪駆動の軽トラックが楽々と通行できたであろう道幅があるが、現在はタニウツギなどの低木やススキなどが生い茂り、わずかにタヌキかなにかの獣道がついている。ここが今日の主たる目的地である。とある筋からの依頼により、ここから東側の山地一帯に生息するクモ類を調査しなければならない。

整備された広い遊歩道から、藪こぎを強いられるような荒道への進入は躊躇した。しかも、雨あがり直後である。低木や下生えの葉先の雨露が、差しこむ日の光を受けてキラリと皮肉な輝きを放ち、そのまま入れば全身濡れるのは必至の状態だ。しかし、躊躇していても始まらない。「こんな時だからこそ…」と勝手な期待を胸に、背のザックより用意周到のカップを取り出して着込み、藪の中へと突入した。

周囲の山地は人の手が入った跡が濃厚で、谷あいにはスギなどの針葉樹の植林地もあるが、あまり大きな樹木がない粗末な二次林である。

採集しながら尾根に沿ってつけられた道を進むと、北側の路肩に根まわりの直径が30cmほどの1本のコナラの木があった。以前、ジャジャ山公園のシイの幹より、小学生がキノボリタテグモを採集したことがあり、太めの樹木の幹は要注意である。コナラの幹に注目し、谷側を向いた根元を覗いた時であった。それはいた！

「エッ、キジロオヒキグモかあ？」

独り言をいう癖はない。単独の採集行では、ほとんど無言である。しかし、この時ばかりは声が出た。初めてお目にかかるしろものなのに、一目で正体が判った。

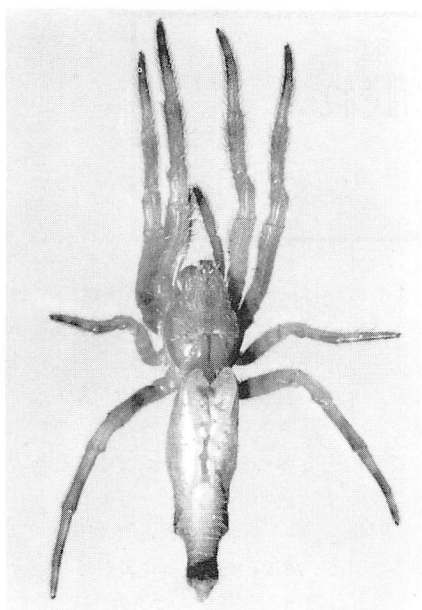


写真3. キジロオヒキグモ

台詞は疑問符付きであるが、無意識に自分で問い直して再確認したからである。

地表から20cmほどの高さ、コナラの根元の内側に湾曲した部分に、直径約12cm、目の細かい横糸による、まるで音楽用のCD盤のような美しい水平円網が張られており、網の中央下面に腹部を上にして黄白色のキジロオヒキグモが点座していた。

ここでカメラがないことが悔やまれた。まったく、雨を懸念して持ってこなかったのだ。

観察もそこそこに、網から落下して地表に逃亡することに備え、まず傘を下に受ける。慎重にクモの体のすぐ下にフィルム容器を近づけると、タイミング良くポトリと中に落ちてくれた。やった！初めての採集である。もちろん、生きたキジロオヒキグモを間近で見るのは初めてである。容器の中を覗くと、細長いクモが脚を一生懸命動かして逃げようともがいていた。少しためらいはあったものの、標本にするためアルコール入りのサンプル瓶に入れる。瓶を目の高さに持ち上げて、ガラスを透かして中のクモをもう一度よく観察した。腹部に特徴があり、前方は二つに突出しており、後は細長いしっぽのような奇妙な突起になっている。体長7mm、未成熟の♀であった(写真3)。

但馬におけるキジロオヒキグモの最初の記録は、『但馬の自然』(兵庫県生物学会但馬支部編、1990、神戸新聞総合出版センター)の本庄四郎氏の記述によれば、

「1957年に、槌賀安平氏が生態観察を粟鹿山で行って報告している」とある。その報告がどんなものであるのか知らないのだからとも言えないが、今から40年以上も前であり、しかも筆者(1959年生まれ)の生まれる前のことである。それから以後については、豊岡高校生物部による記録がある。残念ながら手元に資料がないので確かなことが言えないが、どちらにしても古い記録であると思われる。とにかく30年近く、但馬では採集されなかったことになる。

全国的にも稀で、最近、日本クモ学会から発行されている『遊絲』(2号は1998年5月に発行)という情報誌では、学会員による採集情報が掲載されており、珍種の採集自慢みたいな趣があり、トリノフンダシ属やイセキグモ属などと一緒にキジロオヒキグモの名前も見出される。1997年の記録では、神奈川県や京都府で採集されている。

本種の生態について、『原色日本クモ類図鑑』(八木沼健夫著、1986、保育社)によれば、♂は卵のう内ですでに成熟している超早熟である。『フィールド図鑑クモ』(新海栄一・高野伸二著、1984、東海大学出版会)や、子供向けの『学研の図鑑クモ』(中平清監修、1976、学習研究社)には美しい生態写真が掲載されており、樹木の枝のつけ根などにキレ網の垂直円網を張ると述べられている。今回の観察では樹木の根元に、キレ網かどうかは確認していないが、水平円網を張っている点が異なっている。慣れない場所で張ったから、水平の網になったのだろうか？

さて、その後の採集は、おざなりになってしまった。カップを着ていても内側からの汗で、衣類はグッショリ濡れた。でも、気分は悪くなかった。いつもお目にかかっているお馴染みのクモなんか無理に採集なくてよい。そんな気分になり、早々に切り上げた。

高校時代、ムツトゲイセキグモという珍種を採集したことが、クモの研究へと傾向する一因となった。いまさら、キジロオヒキグモがきっかけとなって、何かを奮起一新することもないだろうが、久しぶりに採集の感動と喜びを味わうことができ、感無量だった。

珍種に出会える機会は、そう度々あるものじゃあない。しかし、但馬の自然の奥深さは油断ならない。不思議な予感、日々の鍛練によって感度が増すものである。その鍛練の方法とは、自然の中に身を置き一体となること。

“むし”ん(無心)になることが一番であると悟ったしで…。